

「同格」をめぐって

小林 幸江

(1995. 10. 31受)

はじめに

「ホームステイは留学生に忘れられない思い出になりました。」

これはある留学生が夏休みのホームステイプログラムに参加した時のことを書いた作文の一文である。文法的な間違いは見当たらないが、自らの体験をしめくくる文にしてはさめた印象を受ける。それは「留学生に」と自らを客観化して書いているからだろう。

「ホームステイは私たち留学生に忘れられない思い出になりました。」

とすれば、自らの体験を通しての留学生の実感が読む者にも伝わってくる。

この「私たち留学生」という言い方は文法では「同格」と言われる。このような言い方はいろいろな外国語に見られるだろうが、本センター使用の『初級日本語』にはまだ出てこない。習っていないから、使えない、そのために冒頭の例のように客観化した文になってしまったということは考えられる。

「私たち留学生」という言い方の代わりに『初級日本語』では「同格」の〈の〉を用いた「友だちのアリさん」という言い方が最終段階に出てくる。この言い方も「私たち留学生」と同じ「同格」の表現形式として考えてもよいだろうか。そもそも「同格」とはどんなことなのか。その他にどんな形式があるのか。また「同格」を形作っている2つの語にはどんな関係が見られ、それが文中における用法にどんな影響を与えているのか。以下、本論では「同格」について改めて考えてみたい。

I、辞書に見る「同格」の定義

まず、辞書で「同格」の定義を見てみよう。

- o 『広辞苑』 Apposition 名詞（または名詞相当句）を文中の他の名詞（または名詞相当句）と並べて置き、記述、説明を補う関係をいう。
- o 『国語大辞典』 文法で同一の文中において、語あるいは文節が他の語あるいは文節と文の構成上同じ機能を果たしていること。
- o 『日本語教育辞典』 （索引に「同格」の項目なし）
- o 『国語学大辞典』 （「同格」の項目なし）
- o 『新明解国語辞典』 「文法で」同じ格。文の中でほかの語と同じ資格で並ぶこと。例、「われわれ日本人は」の「われわれ」と「日本人」

「同格」は重要でないと考えられているのか、その項目が見当たらない辞典もある。

II、文献に見る「同格」の扱われ方

次に、身近にある文献で索引に「同格」の出ているものを二、三示してみよう。

o 『日本文法教室』 芳賀綏

芳賀は特殊な文節として「遊離語」と「間投詞」を設け、その「遊離語」の中に(1)列挙(2)同格(3)限定(4)補充(5)置き換え(6)標示の項目を立てているが、その用法の1つとして「同格」を扱っている。例には「名人、栃錦の引退に次いで異能力士、若乃花にも限界が来たか。」等が挙げられている。

o 『日本語文法・形態論』 鈴木重幸

鈴木は「はだか格」（格のくっつきゼロ）の用法として6つの用法を挙げているが、そのうちの「名詞を並べる」用法の1つとして「同格」の名が見られる。その例には「戦狂、岸信介」「わたしたち働くものが……」等が挙げられている。

以上、改めて「同格」ということについて調べてみると、まず「同格」自体について論じられたものが少なく、あってもその扱いはまちまちであることが分かる。一番良く書かれているのが鈴木重幸（1973）であるが、それでもこの程度である。

Ⅲ、「同格」とは何か

次に「同格」についての知識を整理し、本論では「同格」をどうとらえるか、述べてみよう。

Ⅲ-1、「同格」の構成単位

「同格」の構成単位としては語とそれより長い文節の単位が考えられるが、本論では紙面の都合上、語の単位に限って考察を進めたい。

Ⅲ-2、「同格」の定義

本論では「同格」を統語論的概念としてとらえ、次のように定義する。

- 1つの語が1つの格をとるふつうの形に対して、2つ並んだ語が同じ1つの格をとり、同じ文中で構文上、同じ機能を果たしていることを「同格」という。

「一行は首都東京をめざして出発した。」

という文を例にとると、「首都」、「東京」と2つ並んだ名詞は本来は「首都を、東京を…」とともに〈を格〉をとって、文中で目的語の働きをしているものと考えられる。しかし「同格」の形式ではふつう前の名詞はゼロ格となり、「首都=東京を…」のように後の名詞の格が両者を代表することになる。

この「首都東京」は〈を格〉の他にもいろいろな格をとり、主語、補語、述語等、文中でいろいろな機能を果たす。

首都東京は日本の政治・経済の中心である。 (主 語)

××会議は来月、首都東京で開かれる。 (補 語)

全国でいちばん人口集中の著しいのは首都東京である。 (述 語)

Ⅲ-3、その他の「同格」の表現形式

「われわれ日本人」の形を中心に見てきたが、その他にはどんな形式があるだろうか。

例えば、先に見た「友だちのアリさん」⁽¹⁾のようにいわゆる「同格」の〈の〉によって表わされる形、また「あなたという人」⁽²⁾のように複合助辞〈という〉によって表わされる形を取り上げた辞典にはそれぞれ「同格」の説明がされてい

る。これらは、

友だちの アリ さんが…	あなたという人が…
友だちの アリ さんに…	あなたという人に…
友だちの アリ さんと…	あなたという人と…

というようにいろいろな格をとり、文中でいろいろな機能を果たしているということで、上に示した本論の「同格」の定義を満たしている。そこで本論ではこの2つの形式も「同格」の表現形式として扱う。

なお、本論では便宜上、前の名詞を N_1 、後の名詞を N_2 とし、「われわれ日本人」の表現形式を $[N_1N_2]$ 、「友だちのアリさん」の表現形式を $[N_1のN_2]$ そして「あなたという人」の表現形式を $[N_2というN_1]$ と記号化して示す。

IV、「同格」関係にある N_1 と N_2 の関係

先の定義でも示したように1つの語が1つの格をとるふつうの形に対して、「同格」の形式では2つ並んだ語が同じ1つの格をとる。なぜ2つの語が並ぶのか、またその2つ並んだ語はそれぞれどのような性質をもち、互いにどのような関係にあるのか、上に示した3つの形式A $[N_1N_2]$ 、B $[N_1のN_2]$ 、C $[N_2というN_1]$ について見てみたい。

- | | | |
|---|--|---------------|
| A | <u>首都</u> 東京は日本の政治・経済の中心である。 | $[N_1N_2]$ |
| B | <u>友だちのアリさん</u> はマレーシア人だ。 | $[N_1のN_2]$ |
| C | <u>「あなたという人</u> は <u>いったい何</u> ということをしてくれたんだ。」 | $[N_2というN_1]$ |

N_1 と N_2 の性質を見るために、まず上の例文で「同格」関係を示している N_1 と N_2 を N_1 の文、 N_2 の文というようにそれぞれ別の文にしてみよう。

- | | |
|-------------|---|
| 1、 N_1 の文 | A1 <u>首都</u> は日本の政治・経済の中心である。 |
| | B1 <u>友だち</u> はマレーシア人だ。 |
| | C1 <u>「人</u> は <u>いったい何</u> ということをしてくれたんだ。」 |
| 2、 N_2 の文 | A2 <u>東京</u> は日本の政治・経済の中心である。 |

B2 アリさんはマレーシア人だ。

C2 「あなたはいったい何ということをしてくれたんだ。」

N₂の文はどれも自然な文であるが、N₁の文はA1やC1の文のように唐突で不自然さがあったり、B1の文のように漠然とした書き方になっている。

次にN₁とN₂を入れ替えた例文A'、B'、C'を見てみよう。

× A' 東京首都は日本の政治・経済の中心である。

× B' アリの友だちはマレーシア人だ。

× C' 「人というあなたはいったい何ということをしてくれたんだ。」

A'、C'は非文となり、B'はもとの文とは意味が変わってしまった。上の2つのことから、「同格」関係を示すN₁とN₂の間には意味的にヒエラルキーが見られ、それがN₁とN₂の配列または語順も制約していることがわかる。

次にA [N₁N₂]、B [N₁のN₂]、C [N₂というN₁]の順にそれぞれN₁とN₂の間にはどんな意味関係が見られるのか例を見ながら考えてみよう。

IV-1 [N₁N₂]におけるN₁とN₂の意味関係

A1 われわれ日本人は、どうも過去のことを水に流したがるようだ。

A2 私山田洋平はこの度の選挙に立候補いたしました。

A3 彼ら十代の若者は戦争についてどう思っているのだろうか。

A4 人間天皇の初仕事は敗戦後の日本各地を巡幸することから始まった。

A5 男寅次郎は今日も旅に出る。

A6 政治家田中角栄はロッキード事件で失墜した。

A7 首都東京は日本の政治・経済の中心である。

A8 征服王アレキサンダーは遠くインドにまで遠征した。

A9 百獣の王ライオンは群れを作って生活している。

A10 花の都パリは今、核実験続行か、中止かをめぐって揺れている。

A11 アパルトヘイト、人種隔離はもう死語になったのだろうか。

A12 ユニセフ、国連児童基金の本部はスイスのジュネーブにある。

これらの例に見られるN₁とN₂の関係はいくつかに分類できそうだ。

○ A1～A3の例ではN₁は「われわれ、私、彼ら」と人称代名詞、N₂はその具体的な実体を示している。この場合、「私=山田洋平」のようにN₁=N₂と同一のものをさし示しているため、N₁とN₂を独立させてもともに自然な文として成立する。しかしN₁とN₂を入れ替えると、

- × A' 1 日本人われわれはどうも過去のことを水に流したがるようだ。
- × A' 2 山田洋平私はこの度の選挙に立候補いたしました。
- × A' 3 十代の若者彼らは戦争についてどう思っているのだろうか。

のようにやはり非文となる。N₁とN₂が入れ替えられないということでは修飾語と被修飾語の関係が頭に浮かぶ。N₁の人称代名詞は次に続く具体的な実体を指示、特定化し引き立てる働きをしていると考えたと、この [N₁N₂] においてもそのような関係が認められると言えるのではないだろうか。

○ A4、A5の例ではN₂は「天皇、寅次郎」と具体的な固有名詞を示し、その前のN₁はそれらを含む総称的な名称（または総括的な概念）を表わす「人間、男」が来ている。この場合のN₁は「人間、男」という文字通りの意味というより、N₂の具体的な固有名詞の示す実体の人間性なり、男性的な面、つまりそれぞれの持つ本質なり内面性なりを特に強調するために添えられたものといえることができるだろう。

○ A6、A7の例ではN₂は具体的な実体、N₁はその代表的な側面または資格を表わす語が来ている。つまりN₁はN₂の主な属性を強調するために添えられたものといえることができるだろう。

○ A8～A10の例ではN₂は具体的な実体を示し、N₁はその特徴、またはそれを端的に表わす別称を表わす語が来ている。つまりN₁はN₂の特性を強調するために添えられたものといえることができるだろう。

○ A11、A12の例ではN₁はN₂の外来語の和訳を示している。N₁、N₂はそれぞれの言い換えということもできるので、この場合にはN₁はN₂を入れ替えて

- A' 11 人種隔離、アパルトヘイトはもう死語になったのだろうか。
- A' 12 国連児童基金、ユニセフの本部はスイスのジュネーブにある。

のようにしても文は成立する。それはちょうど「つまり」や「すなわち」等の

副詞で結ばれた関係と似ている。A11を例にすると、

- a 11 アパルトヘイト、つまり人種隔離はもう死語になったのだろうか。
a' 11 人種隔離、つまりアパルトヘイトはもう死語になったのだろうか。

というようにa11、それを入れ替えたa' 11ともに自然な文として成立する。「つまり」に挟まれたN₁とN₂は対等の関係を示しているということができる。

ここでもういちどA、A' 11、12の例にもどる。耳から聞いた印象としては例にあるように〔N₁外来語、N₂その和訳〕の順番の方が理解しやすいように思われるが、それを入れ替えても文が成立するということから、ここでも「つまり」の入った文と似た関係が成り立つと言えるのではないだろうか。つまりA11、12の例のようにN₁とN₂がそれぞれの言い換えの関係にある時、N₁とN₂は互いの入れ替えが可能という意味で対等の関係となる。そこで本論ではA11、12の例には他の例と区別して〔N₁、N₂〕と〈、〉を打ってある。⁽³⁾

しかし、外来語とその和訳に当たる語をあえて並べて書くというのは意味的に見れば、他の例と同じように一方が一方の意味補足または強調するためと考えられる。

その他のA、A' 1~10の例ではどうだろうか。「つまり」や「すなわち」等の副詞を入れてみよう。

- | | |
|---------------------|-------------------------|
| a1 われわれ、つまり日本人は～ | a' 1 日本人、つまりわれわれは～ |
| a2 私、つまり山田洋平は～ | a' 2 山田洋平、つまり私は～ |
| a3 彼ら、つまり十代の若者は～ | a' 3 十代の若者、つまり彼らは～ |
| × a4 人間、つまり天皇は～ | × a' 4 天皇、つまり人間は～ |
| × a5 男、つまり寅次郎は～ | × a' 5 寅次郎、つまり男は～ |
| × a6 政治家、つまり田中角栄は～ | × a' 6 田中角栄、つまり政治家は～ |
| × a7 首都、つまり東京は～ | × a' 7 東京、つまり首都は～ |
| a8 征服王、つまりアレキサンダーは～ | × a' 8 アレキサンダー、つまり征服王は～ |
| a9 百獣の王、つまりライオンは～ | × a' 9 ライオン、つまり百獣の王は～ |
| a10 花の都、つまりパリは～ | × a' 10 パリ、つまり花の都は～ |

a1~a3の例にあるようにN₁が人称代名詞、N₂がその具体的実体を示す

時は $N_1 = N_2$ と同一のものをさし示しているから a、それを入れ替えた a' とともに「つまり」は入りうる。しかし、A11、A12の例では N_1 と N_2 を入れ替えて A' 「日本人われわれは～」とすると、不自然になってしまう。つまり、これはA1～A3の例における、 N_1 と N_2 の関係は対等とは言えないということを示している。

また、a8～a10の N_1 が N_2 の別称を示す時は「つまり」は入りうるが、 N_1 と N_2 を入れ替えた a' 8～a' 10では不自然な文となる。これは別称が固有名詞になるほど独立性が強くないからであろう。ここでも N_1 と N_2 の関係は対等とは言えない。

以上の場合を除き、その他の a、それを入れ替えた a' 4～a' 7の例では「つまり」は入る余地がない。それはすなわちこれらの例では N_1 と N_2 は互いに切り離せない関係にあり、 N_1 と N_2 のひとまとまりで構文上1つの単位を形作っているということを表わしているからではないだろうか。

以上 [$N_1 N_2$] の N_1 と N_2 の関係をまとめると次のようになる。

例	N_1	N_2	N_1 と N_2 の 関係	N_1 の働き
A1～3	人称代名詞	具体的な 実 体、 固有名詞	非対等の 関 係	N_2 の指示、特定化
A4、5	総称的名称			N_2 の本質、内面性を強調
A6、7	資 格			N_2 の主な属性を強調
A8～10	別 称			N_2 の特性を強調
A11、12	外来語 ⇔	の和訳	対等の関係	N_2 の意味補足・強調

以上、[$N_1 N_2$] の同格表現では N_2 は具体的な実体を示し、 N_1 はそれを引き立て強調するために添えられたものと言うことができるだろう。言い換えれば意味の主眼は N_2 にあり、 N_1 はそれを修飾または補うものということになる。そして

このことが、芳賀（1962）にある「東京、大阪、名古屋」のような単なる「列挙」や「東京都世田谷区」のような「限定」、「東京並びに大阪」のような「補充」また「五月三日、この日こそ」のような「置きかえ」等と「同格」を分けることになる。

IV-2 [N₁のN₂]におけるN₁とN₂の意味関係

[N₁N₂]の例を[N₁のN₂]に置き換えてみよう。

A1	<u>われわれ日本人</u> は～	× B1	<u>われわれの日本人</u> は～
A2	<u>私山田洋平</u> は～	× B2	<u>私の山田洋平</u> は～
A3	<u>彼ら十代の若者</u> は～	× B3	<u>彼らの十代の若者</u> は～
A4	<u>人間天皇</u> は～	△ B4	<u>人間の天皇</u> は～
A5	<u>男寅次郎</u> は～	△ B5	<u>男の寅次郎</u> は～
A6	<u>政治家田中角栄</u> は～	B6	<u>政治家の田中角栄</u> は～
A7	<u>首都東京</u> は～	B7	<u>首都の東京</u> は～
A8	<u>征服王アレキンダー</u> は～	B8	<u>征服王のアレキンダー</u> は～
A9	<u>百獣の王ライオン</u> は～	B9	<u>百獣の王のライオン</u> は～
A10	<u>花の都パリ</u> は～	B10	<u>花の都のパリ</u> は～
A11	<u>アパルトヘイト、人種隔離</u> は～	× B11	<u>アパルトヘイトの人種隔離</u> は～
A12	<u>エセ7、国連児童基金の本部</u> は～	× B12	<u>エセ7の国連児童基金の本部</u> は～

これらの例に見られるN₁とN₂の関係もいくつか分類できそうだ。

○ B1～B3の例では「の」は所有の意味になってしまい、「同格」の表現からはずれてしまった。しかしN₁とN₂を入れ替えると、

- B' 1 日本人のわれわれは、どうも過去のことを水に流したがるようだ。
 × B' 2 山田洋平の私はこの度選挙に立候補いたしました。
 B' 3 十代の若者の彼らは戦争についてどう思っているのだろうか。

のようにB' 2の具体的な人名の場合を除いてB' 1とB' 3は文として成立しそうである。その場合、N₂はN₁「われわれ、彼ら」の状況を述べていると見ることができよう。

- B4、B5の例ではN₂の具体的実体を示す語の前にそれを包括する総称的な名称「人間、男」を添えることにより表現は叙述的を通り越し、冗漫または不自然なものになってしまった。ここでも同格の表現からはずれてしまった。「数字の3は～」の言い方もあるが、これは多義語の「サン」を数字に限定し意味の取り違えのないように強調したものと思われる。
- B6～B10の例ではN₁はN₂の資格や別称を示している。B6～B10の表現は[N₁N₂の簡潔さに比べ、叙述的である。そのためか[N₁N₂]と[N₁のN₂]の間には書きことば、話しことばの文体的な違いも感じられる。
- B11、B12の例ではN₁とN₂はそれぞれの言い換えでN₁=N₂と同一のものを示している。そのような場合「の」で結ぶと、不自然な表現となる。先のB' 2の「山田洋平の私」の例でも「山田洋平=私」のようにN₁とN₂が同一の実体を示しているため、同様に不自然な文となってしまった。
N₁とN₂を入れ替えても

- △ B' 11 人種隔離のアパルトヘイトはもう死語になったのだろうか。
- △ B' 12 国連児童基金のユニセフの本部はスイスのジュネーブにある。

のようにやはり不自然な文となる。

以上、[N₁のN₂]のN₁とN₂の関係をまとめると次のようになる。

例	N ₁	N ₂	N ₁ とN ₂ の関係
B1～3	人称代名詞	具体的実体 固有名詞	非「同格」関係
B4、5	総称名詞		
B6～10	資格、別称		「同格」関係 (叙述的、話しことば)
B11、12	外 来	⇔ その和訳	不自然な文

[N₁N₂] の「同格」表現が成立するのはN₁がN₂の資格や別称を表わす語が来た時、つまりN₂の属性や特性を示す場合であり、それは [N₁N₂] の表現形式と比べ、叙述的で話しことば的表現となる。

VI-3 [N₂というN₁] におけるN₁とN₂の意味関係

[N₁N₂] の例を [N₂というN₁] に置き換えてみよう。

A1	<u>われわれ日本人</u> は、～	×	C1	<u>日本人というわれわれ</u> は～
A2	<u>私山田洋平</u> は～	×	C2	<u>山田洋平という私</u> は～
A3	<u>彼ら十代の若者</u> は～	×	C3	<u>十代の若者という彼ら</u> は～
A4	<u>人間天皇</u> は～	△	C4	<u>天皇という人間</u> は～
A5	<u>男寅次郎</u> は～	△	C5	<u>寅次郎という男</u> は～
A6	<u>政治家田中角栄</u> は～		C6	<u>田中角栄という政治家</u> は～
A7	<u>首都東京</u> は～		C7	<u>東京という首都</u> は～
A8	<u>征服王アレキンダー</u> は～		C8	<u>アレキンダーという征服王</u> は～
A9	<u>百獣の王ライオン</u> は～		C9	<u>ライオンという百獣の王</u> は～
A10	<u>花の都パリ</u> は～		C10	<u>パリという花の都</u> は～
A11	<u>アパルトヘイト、人種隔離</u> は～		C11	<u>人種隔離というアパルトヘイト</u> は～
A12	<u>ユニセフ、国連児童基金の本部</u> は～		C12	<u>国連児童基金というユニセフ</u> は～

○ C1～C3の例の「われわれ＝日本人」のようにN₁＝N₂と同一のものをさし示している時には、非文となってしまう。

○ C4～C10の例ではN₂の示す具体的な実体を包括する総称的な名称またはその資格や別称を表わす語がN₁に来ている。この場合は「同格」関係が成立する。このことはC1～C3の文についても言える。つまり「日本人という国民は～」「山田洋平という男は～」「十代の若者という連中は～」のようにN₁の部分がN₂を包括する総称的な名称を表わす語いであれば文は成立する。

ところでC7の例を見てみよう。日本の首都が東京であることは周知のことで、その名称をあげるまでもない。それをあえて「東京という首都は～」というのは東京を特に取り立ててのことと考えられる。「3という数字は～」もこれ式の言い方である。

その他C4～C10も同様であるが、その取り立て強調がさらに進むと、文脈

によっては「あなたという人は～」、「お前という奴は～」のように非難めいた言い方にもなる。

- C11、C12の例でもN₁、N₂はそれぞれの言い換えで、同じことを言っている。この場合もC1～C3の例と同様、非文になってしまうが、N₁をN₂を包括する総称的な名称を表わす語に置き換えて、「人種隔離という政策は～」、「国連児童基金という機関の～」とすると文は成立する。

以上、[N₂というN₁]のN₁とN₂の関係をまとめると次のようになる。

例	N ₁	N ₂	N ₁ とN ₂ の関係
C1～3	人称代名詞	具体的実体 固有名詞	非 文
C4～10	総称的な名称 資格、別名		「同格」関係 取り立て→非難めいた文
C11、12	外来語	⇔ その和訳	非 文

[N₂というN₁]の「同格」表現が成立するのはN₁がN₂を包括する総称的な名称、資格、別称を表わす語が来た時、つまりN₁がN₂の本質や属性、特性を示す場合に成り立ち、取り立ての意味を表わす。それは時に非難めいた表現にもなる。

以上、見てきた「同格」関係にあるN₁とN₂の関係についてまとめると、次のようになる。なお、ここではA [N₁N₂]、B [N₁のN₂]、C [N₂というN₁]の個々のまとめについては繰り返しを避ける。

- 1、構文上も、「同格」関係にあるN₁とN₂はそのひとまとまりが1つの単位をなす。
- 2、「同格」関係にあるN₁とN₂の間には意味的にヒエラルキーが見られ、それはN₁とN₂の語の配列、語順も制約している。ただし、[N₁外来語、N₂その和訳]のようにN₁とN₂がそれぞれの言い換えの関係にある場合にはN₁とN₂の語の配列、語順は入れ替え可能となる。

- 3、N₂は具体的な実体または固有名詞を示し、N₁、N₂の意味を代表する。これに対しN₁はN₂の意味を補い、強調する働きをしている。
- 4、N₁、N₂の2つの名詞のうち、意味の主眼はN₂にあるが、N₁とN₂を並べて共起させることによって、表現効果は増すことになる。例えば [N₂というN₁] という表現形式では文脈によっては〈訴え〉や〈非難〉等、文のモダリティーに関与することもある。

おわりに

本論では「同格」の意味を改めて問い直すということから出発して「同格」表現と言われる [N₁N₂]、[N₁のN₂]、[N₂というN₁] についてN₁とN₂の意味関係を見てきた。紙面の都合上、N₁、N₂の語レベルに限って見てきたが、今後、更に語より長い単位についても同様の検証を続けていきたいと考えている。

注

- (1) 「下の実質名詞を種々の関係（所有、所属、同格、属性、その他）において限定する。」 国語学大辞典（1982）
- (2) ①～⑦の用法が記載されていて、最後の⑦に「同格を表わす」の説明が見られる。 国語学大辞典（1982）
- (3) このような場合、「国連児童基金（ユニセフ）」のようにどちらかを括弧（ ）の中に入れて記述する例も多い。

参考文献

- 『教育文庫3・日本語文法・形態論』（1973）鈴木重幸 麦書房
- 『日本文法教室』（1962）芳賀 綏 東京堂
- 『[研究ノート] [～トイウ] [～トイック]』（1988）藤田保幸
文芸研究 河内国文11
- 『国語学大辞典』（1982） 監修 小学館
- 『日本語教育辞典』（1982） 日本語教育学会編 大修館

A Discussion of Apposition

KOBAYASHI Yukie

"A homestay provides an experience that the foreign exchange student will never forget." This sentence comes from an essay written by a foreign exchange student who participated in a summer homestay. There are no grammatical mistakes, but it appears rather impersonal coming from someone who actually underwent the experience himself. He tries to objectify this personal experience by using the expression "the foreign exchange student." Changing the sentence to : "A homestay provides an experience that we foreign exchange students will never forget," lets the reader know that the writer himself actually experienced a homestay.

The grammatical term for the use of the phrase "we foreign exchange students" in this sentence is "apposition". Grammatical apposition is most likely employed in a variety of the world's languages, but this type of apposition does not occur in this Centre's "Beginning Japanese" textbook. In other words, students can't use the required apposition, because they haven't learned it yet. For this reason their sentences become impersonal, as illustrated in the example above.

While an example such as "we foreign exchange students" does not occur in "Beginning Japanese," expressions such as : tomodachi-no Arisan "My friend Ali" do occur. Do both of these expressions fall into the category of apposition? What exactly is apposition? What other forms does it take? What exactly is the relationship between the noun phrases involved? What purpose does apposition serve and what effect does it have on the sentence? This paper takes a fresh look at the concept of apposition.